7

TALK

対談

「住みよいまち」が人を動かし、経済をまわす

森　雅志
（富山市長）

×

小宮山　宏
（三菱総合研究所理事長）

—— 課題先進国ニッポンと高齢化問題

小宮山　日本は貧しかった時代から、経済成長を成し遂げ、公害問題やエネルギー問題なども克服してきました。こうした大きな問題をいち早く乗り越えてきたのが私たち日本です。経済的に豊かになり平均寿命が延びたからこそ、地球環境や高齢化など新しい問題が出てきたわけです。出生率の低下も豊かな国に共通する問題です。日本の人口はすでにピークを過ぎており、2050年にはおよそ9,000万人にまで減少するといわれています。

森　地方は高齢化も人口減少も先行して進んでいます。大都市はこれから急激に高齢化しますが、首都圏の人口の吸引力は高いので、人口は約3,000万人からは大きく減ることがないと思います。そうだとすると、地方だけで9,000万人が6,000万人に減る。3分の2になるという計算です。

全国の地方都市はこれを見据えて、「いま何をすべきか」を真剣に考え、政策を進めていかなければなりません。いま手を打っておかないと、今後大きな差が出てくることになるでしょう。

小宮山　そのとおりだと思います。21世紀は、世界規模で地球温暖化や高齢化といった問題に直面する時代です。経済も大量生産・消費ではなく、持続可能なものをつくっていかなければなりません。こうした現状のなか、日本の地方は高齢化が先行していますが、自然エネルギーなど持続可能な資源に恵まれています。これをどう活かすか。21世紀の課題を解決していくチャンスがあるのは「地方」であり、これからの地方は世界のなかでも先進的な社会モデルを構築できる可能性があるといえるでしょう。

—— 「住みよいまち」をつくる

森　現在、富山市が取り組んでいるのは「住みよいまち」をつくることです。やはり高齢者が増えるので、まちづくりの方針はシンプルなこの言葉に尽きるといえます。

「住みよいまち」づくりにおいて、最も重要なのは「雇用」と考えており、これこそが安定的に人口を吸引する源となります。ただし、これまでのような企業誘致をしようとするわけではありません。

富山市の東に位置する雄大な立山連峰は、四季折々の多彩な表情を見せる　写真提供：富山市

たとえば、ある企業から、他県にある工場を閉鎖して富山市の工場に集約したいという申し出がありました。その企業の労務担当役員の方から聞いた話では、工場の職員の奥様たちと富山市をこっそり2度ほど視察し、市の公立中学校の自由通学制度をはじめ、さまざまな政策を総合的に調査して決めたそうです。

企業が工場などの移転先を決めるとき、普通は質のいいサプライヤーがいることや、物件の条件がよいことなどが決め手となるでしょう。しかし、今の企業経営者の多くは、大切な社員が単身で行くような都市ではなく、家族を伴って安心して転勤できる都市に移転先を求める方向にシフトしていると思いました。

富山市を工場の移転先として検討してもらうとき、「映画館やコンサートホールがあるのか」と思われるようではダメですし、文化水準に加え、教育水準の高さや福祉の充実度も求められるでしょう。こうした要素を満たす、総合力のある地方都市をつくる必要があり、その1つが「住みよいまち」づくりだと考えています。

小宮山　工場では、どんどん人が減っています。生産性の向上、設備の省力化が進み、雇用も少なくなっている。GDPに占める製造業の割合も、日本

では20%台です。しかし、モノが豊かになれば、次の段階として、教育、文化、娯楽などサービスの分野でのニーズが高まり、そこに産業が生まれ、その周辺で雇用が必要になる。このような循環をつくっていかなければなりません。

―― 公共交通を中心としたまちづくり

森　地方の現状を見ると、多くの都市はクルマさえあれば暮らしやすい、拡散型のまちづくりをおよそ40年間行ってきました。その結果、高齢者が増えたことで、不便で暮らしにくいまちになりつつあります。これからはクルマだけではなく、公共交通も使う都市構造にシフトさせていくべきです。同時に、まちの中心部を魅力あるものとし、住宅も整備していく必要があるでしょう。

森 雅志（もり・まさし）
富山市長。1952年生まれ。富山中部高校・中央大学法学部卒。95年富山県議会議員に初当選。99年再選を果たす。2002年旧・富山市長に初当選。05年市町村合併で発足した現・富山市長に当選。趣味は登山や語学、サックス演奏など多岐にわたる。また自身のホームページ「森のひとりごと」（http://www.morimasashi.jp/）にエッセイを寄せる。

小宮山　まさに、コンパクトシティという考え方そのものですね。富山市は「環境都市」としても知られていますが、どのような取り組みを行っているのですか。

森　公共交通のブラッシュアップ、公共交通の便利なエリアへの市民の誘導、市の中心部を魅力的にする。この3つを同時に進めています。公共交通についてはLRT（次世代型路面電車）を導入し、パークアンドライドを実践しています。これによりCO_2削減にも貢献しています。

小宮山　地方の公共交通は採算が合わずに本数が減らされ、その結果、利用者が減り、最後には撤退しているところが全国で多く見られます。

森　採算だけを考えて切っていくと、公共交通は全部なくなり、とても暮らしにくいまちになってしまいます。

そこで私たちは、公共交通は道路と同じ「公共財」と捉えるようにしています。そうすると、道路を整備したり、補修したりすることに公費を使うように、公共交通の維持に公費を使うことにも妥当性が出てきます。

小宮山　そうした背景があって、富山市では全国で最初にLRTが運行できたのですね。ただ、公共交通の整備、とりわけLRTの導入は全国でも検討されていますが、なかなかうまくいきません。成功のポイントは何でしょう。

森　財源的には恵まれていました。整備に58億円かかりましたが、もともとJR西日本の赤字路線でしたから、LRT導入にあたって約10億円の寄付をいただきました。このほかにも支援があり、市の負担は17億円程度で済みました。これも、公共財としての公費投入の妥当性を認めていただいた結果といえるでしょう。

公共交通を整備したことで、民間の再開発事業や設備投資が活発化しました。マンションは販売するとすぐに完売する状況で、シネコンの建設も計画しているほか、2,200席あるコンサートホールでは本格的なオペラの上演も行っています。オペラの幕間にはワインを販売しており、お客様の行列ができます。これらの取り組みにより、まちの中心部に自然発生的に市民が集まるようになり、また、クルマ一辺倒だった市民のライフスタイルも少しずつ変わり始めています。

小宮山 宏（こみやま・ひろし）
三菱総合研究所理事長。1944年生まれ。67年東京大学工学部化学工学科卒業、72年同大学大学院工学系研究科博士課程修了。2005年東京大学総長、09年総長顧問。専門は化学システム工学、地球環境工学、知識の構造化など。著書に『「課題先進国」日本』（中央公論新社）、『低炭素社会』（幻冬舎）、『日本「再創造」』（東洋経済新報社）など多数。

小宮山　フランスのストラスブールでも、都心における自動車利用を制御したこと

日本で初めて導入された本格的なLRT。人と環境にやさしい公共交通として注目を集めている（上、下右）
LRTのネットワーク図。将来的に他路線との接続も計画されており、さらなる利便性の向上と地域活性化が期待されている（下左）
写真提供:富山市

で商店の売り上げが上がったといわれています。要するに、クルマではなく「人が動く」ことが重要なのですね。

「カネ」は、「量」×「まわるスピード」です。たとえ人口が3分の2に減ったとしても、1人の人間が1.5倍外に出て動けば、経済（消費）は同じ計算になるはずです。その結果、新たな産業や雇用が生まれ、よい循環がつくられていくでしょう。

森　高齢者が動く仕組みづくりの1つとして、富山市には「おでかけ定期券」があります。これは、郊外と中心商店街の間のバス料金を距離に関係なく100円にするというものです。ただし、郊外と中心商店街の間にあるショッピングセンターで降りる場合は正規料金を払っていただきます。

これは表面的には地域の商店街の振興策なのですが、同時に長寿対策でもあります。つまり、高齢者の外出機会を増やし、元気になってもらうことが目的です。この定期券を使えば、往復200円で市内の隅々にまで行けるし、商店街の方々とふれあうこともできます。現在、高齢者の3割が「おでかけ定期券」を所持しています。

小宮山　公共交通のブラッシュアップは、大都市ほど難しいかもしれないですね。東京では今、自転車に乗る人が増えており、安全上の問題があるのですが、自転車レーンをつくろうと思っても道路が狭くてできません。

森　富山市の場合、自転車の共同利用システムもいち早く取り入れました。歩道が広いため交通環境の整備もやりやすかったですね。私どもの市は戦争で空襲にあったのですが、戦災復興の際に先人が広い道路をつくってくれました。

―― 高齢者も働くことが生きがいに

森　先日、日本の生活保護の受給者が200万人を超え、史上最多になったというニュースを見ましたが、富山市は全国一、生活保護率が低くなっています。私はこれを富山市のポテンシャルだと思っています。

小宮山　同じ150万円でも、生活保護でもらうのと、自分で稼ぐのとではまったく異なります。大切なのは、ある程度、規則的に社会参加ができて、身体を動

高齢者の3割が持っている「おでかけ定期券」。往復200円で市内の隅々にまで行くことができ、高齢者の外出機会が増えている
写真提供:富山市

かすこともでき、誇りをもって暮らしていくことです。それを一言でいうと、やはり「雇用」ということになるでしょう。これからの人口減少社会では、社会参加の動きをどのようにつくっていくかが重要になりそうですね。

森　今の時代、多くの人は「生活していくのにいくらかかるから、収入はこれくらいないとダメ」とか、「収入がないから結婚できない」「もっと都会で暮らそう」などと言います。でも、地方ではそんなにお金がなくても十分に生活していくことができます。

　私は、人口減少社会をよりよく生きるヒントは「どうやって収入を得るか」と、「どれくらいあれば幸せな暮らしができるか」ではないかと思っています。富山市の中山間地域に住んでいる人は、あまり収入がありませんが、幸せそうに暮らしている人がたくさんいます。

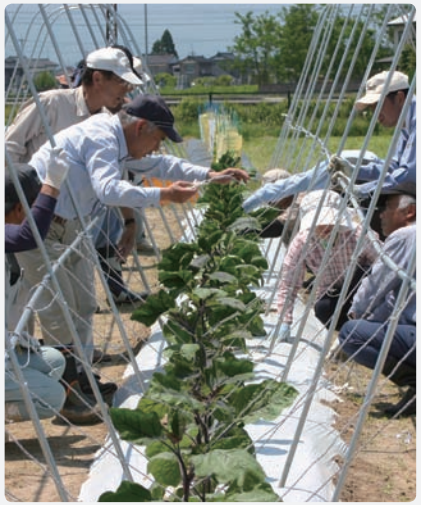
小宮山　高齢化の進展によって、生産年齢人口が大きく減少することが不安視されていますが、今の高齢者の体力を見ると、昔の60歳が今の75歳くらいです。それならば、みんなが75歳くらいまで働かないと、よい社会はつくれないと思います。

森　まったくそのとおりだと思います。エイジングシフトは確実につくっていかなければならないでしょう。

小宮山　75歳まで働く代わりに、給料は安くてもいい。みんなが少しずつ働き出せば、社会全体がよい方向に動き出すはずです。

森　定年になって年金暮らしになったか

市の中心部にある、街なか賑わい広場「グランドプラザ」。一年を通してさまざまなイベントが行われ、市民がふれあう憩いの場となっている（上）
自転車の共同利用システム「アヴィレ」も導入。市内各所にあるステーションから自由に自転車を利用し、任意のステーションに返却できる（下左）
特殊プラスチックパネルの上をスケート靴で滑る、冬の人気イベント「エコリンク」（下右）
写真提供:富山市



「技術の伝承」を目的に市が設立した農業学校では、高齢者を中心とする市民が生き生きと身体を動かしている。梨の一次摘果：5月（上）、ナスの支柱誘引：6月（下左）、ストックの採花：11月（下右）
写真提供:富山市

らといって、働けないわけではありませんからね。富山市では農家の高齢化が進んでいますが、そのなかには農業の名人たちがいます。非常に高度な農業技術をもっており、おいしい野菜をつくることができるのですが、たとえば大根づくりの名人は、筋力的な問題で、大根を畑から抜き、農道まで運んで出荷する作業ができず、農業が続けられなくなってしまいます。この結果、何より問題なのは「技術の伝承」ができないことです。そこで、市では農業の学校を開校しました。

小宮山　知の伝承ですね。

森　2年コースが基本で、年間200日くらいスクーリングを行い、大根やトマトなどをつくります。農業学校の生徒を、技術のある専業農家（名人）のところに派遣することもあります。これにより、農業技術の伝承に加え、高齢者に新たな生きがいをもってもらうこともできます。

小宮山　高齢学・加齢学の研究によると、高齢者の知識はずっと伸び続けているそうです。たとえば、ボキャブラリーは70歳くらいまで増え続け、その後も落ちません。つまり、高齢者が活きるのは「知恵を使う場所」なのです。農業というのは、まさにその適地といえますね。

富山市の高齢者の医療費はどれくらいですか。

森　全国的に見て少ないほうだと思います。富山市は介護保険の費用が高いんです。その理由は、みんな働いているので、在宅介護をしたくないのですね。なかには、要介護2や3なのに施設に入れたいという人がいます。そこで、市では現在、介護予防に取り組んでいます。

—— マルチハビテーションという暮らし方

小宮山　最後に、これからの富山市の姿についてお聞きしたいのですが。

森　現在、交通の便利なエリアに住む市民は全体の28%ですが、今後20年でそれを40%にまで上げたいと思っています。といっても、コンパクトな暮らしだけを肯定するわけではありません。この目標が達成できても、60%の市民は郊外に住むことになります。

農業や漁業、林業に携わる人、森のなかでのびのびと暮らしたい人など、市民には多様な暮らし方があります。郊外

に住む市民には、最低でも1日2回は往復するデマンドバスを運行して、買い物や病院への通院などに役立つ支援を行っていきます。農村地帯では食料を自給自足していることが多いので、そうした人たちに魚や干物を届けるような移動販売も手掛けていきたい。また、防災対策として集落ごとの長の家に衛星電話を設置することも考えています。

それから、小水力発電の整備も進めていきます。富山県は海抜3,000mから0mまでの落差があり、市内の隅々まで引いてある農業用水の高低差を利用することができます。水力発電を行う水量は十分にあるので、集落単位で小水力発電を行うのが夢です。

小宮山　これまで地方の話を中心にしてきましたが、これからは地方と都会、両方のいいところを引き出して生きることが重要になるような気がします。

夏目漱石の小説『三四郎』では、主人公が熊本から東京に出てくるとき、名古屋で一泊します。でも、今は飛行機や新幹線でもっと速く移動できます。情報交換にいたっては、地球の裏側と簡単に通信することができる。このように人の移動や情報の交換を妨げる制約から人間はかなり自由になりました。

そして現在、日本全国に800万軒の空き家があるといいます。それならば、800万世帯が2軒の家をもってもいいと思うのです。そんな「マルチハビテーション」（住居の複数化）という考え方があってもよいのではないでしょうか。

森　その動きは富山市でも出てきています。市の中心部と郊外にそれぞれ家をもち、休日に郊外で農業をしたり、あるいは郊外の広い戸建て住宅に住む人が高齢者賃貸住宅を借りたりしています。「終の住処」という日本的な文化が変わってきているのを実感します。

小宮山　現在の日本は週休2日制ですが、将来的には週休3日になるのではないかと私は思っています。すると、平日の4日間は都会で仕事をして、休日の3日間は家族と地方でのんびり過ごすこともしやすくなります。

森　都会の人も地方を楽しみ、地方の人も都会を楽しむ。マルチハビテーションは、すごく豊かな社会の姿だと思います。